庶路学園9年生の及川実来（みくる）さんと7年生の禅太（ぜんた）君のお母さんにお話しを聞きました。

長女の実来が中学1年生、長男の禅太が小学5年生になるときに義務教育学校になったのですが、「中1ギャップ」というものはなく、進学できたと思います。中学生（7年生）になったら制服を着ますので、中学生になったという自覚もきちんとあったと思います。

もう一つ、義務教育学校になって良かったことは「教科担任制」です。普通ですと、中学で「教科担任制」になるのですが、義務教育学校ですと、5年生で「教科担任制」になりますので、先生に対する不安がありません。長男も「専門の先生に教えてもらえるのがうれしい」と言っていました。昨年、新型コロナウイルスで学校が臨時休校になったとき、庶路学園の先生たちが子どもたちにメッセージ動画を作成してくれました。町のホームページから子どもたちと一緒に見たのですが、すごくうれしい気持ちになりました。子どもたちも、とても喜んでいました。

義務教育学校になり、運動会も小学校と中学校で一緒になりました。小学生と中学生が一緒の競技に出ている姿を見ていると、とても微笑ましく、幸せな気持ちになります。よく大きな子たちが小さな子たちと手をつないで、一緒に学校へ通っている姿を見かけます。小さな子たちも、大きな子が一緒にいると安心して学校へ通えると思うんですよね。義務教育学校になってから、自然とそうなったと聞きました。高等部の生徒たちには、思いやりの心が育つんじゃないかなと思います。

及川望さん

放課後学習サポート事業

放課後学習サポート事業とは、学校に配置されている講師が、放課後にタブレット端末等を活用し、児童一人一人の学習能力に応じた教育を行うものです。低学年の早い段階から家庭学習を習慣づけるため、プリント学習のほか、タブレット端末の「速読」という教材を活用した学習に取り組んでいます。

令和元年度の事業対象は、小学1年・2年生でしたが、今年度は小学3年生までを対象としました。来年度は4年生までを対象とし、一年ずつ対象学年を増やしていく予定です。

庶路学園３年生の放課後学習の様子

味や意欲、関心を高める環境づくりができればと思っています。

具体的には、タブレット端末をテストや授業内容、学校行事などの振り返りに活用したいと考えています。たとえば、テストで間違えた問題をデータとして管理し「解き直す」ことで、その後の児童生徒のフィードバックなどに生かせます。データの記録から、過去の自分と比較し、頑張ったプロセスや努力が見えることで、学習意欲の向上に繋がると思います。また、タブレットで管理することにより、教員間でも児童生徒一人一人のデータを情報共有できますし、児童生徒との認識のずれをなくし、理解を深めることにもなります。保護者もデータで見ることができれば、一年間どのような勉強をしてきたのかということがよく分かると思いますので、そういった使い方ができないかと検討を進めています。

手を挙げて発言するのが苦手な子どもたちも、タブレット上であれば発言できるということがありますので、そこから自信に繋がっていけばいいなと思っています。タブレット端末は、これからの時代を生きる子どもたちにとって、有効なツールになると思います。